
忘れられた祈り

葉月羽音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられた祈り

【Nコード】

N6998T

【作者名】

葉月羽音

【あらすじ】

人が忘れた祈りの行く末

誰も知らぬまま、識らぬまま、零れ落ちていく

意味すら忘れ去られたその祈りは

果たしてどのような物語の幕開けを告げるのか

(ブログ「World End」掲載作品)

掌から零れた祈りの欠片

それは、忘れられた祈り

「世界が笑った瞬間に私を忘れて？」
愛しい笑みを零した白の少女はそう願う

「失うくらいなら、奪ってほしい。」
生命を星屑に託した黒の少年はそう望む

届かぬ祈りを忘れた人間は

「歪んでしまう願いなど、誰も聞かない。」
朽ち果てた教会で銀の乙女はそう嘆き

「本当に救いが存在するのなら、どうか、
壊れて逝く街中で金の青年はそう叫ぶ」

本当の祈りの意味を知らない

「全ては、君たちが選んだことだと、識るといい。
無情にも掬えぬ両腕を広げた色彩の神はそう告げる」

忘れられた祈りを望む人間に、救いは存在するのだろうか

世界が笑った瞬間に私を忘れて？

「世界が笑った瞬間に私を忘れて？」

白い部屋のベッドの上に横たわる少女は、上半身を起こした状態で少年にそう言った。

浮かべた笑みは愛しげに少年を見つめて、穏やかな声がその願いを違うことを許しはしない。

ベッドの傍に置かれた椅子に腰かけていた少年は、ただ驚きに眼を見開いて少女を見つめる。

どうしてそんなことを、と顔にでかかど書かれているように見えるほど、少年は衝撃を受けていた。

口をパクパクと動かし、けれど、何も出てこない。代わりに掠れた息が吐き出されては吸い込まれる。その繰り返しだけが続く。

少女はその様子にクスクスと笑みを零しながら、決して冗談だと言う言葉は紡がなかった。お願いよ、と静かに念を押すだけ。

白い部屋。 白い窓。 白いベッド。 白いパジャマ。 白い髪。 白い絵本。
白い本棚。 白いスリッパ。 白いカーテン。 白い扉。 白い肌。 白い瞳。
白い鏡。

全てが白で染まるその部屋で、少女は生まれてからずっと閉じ込められて生きてきた。

生まれた時に胸に抱えた難病。 それを治す手立てが見つからないが故の処置。

少女は幾度も手術を繰り返して、生と死の淵を彷徨ってきた。その空間すら白く感じてしまうのは、彼女の世界が白一色だからだろうか。少女自身が目にする色はほぼ全て白のみ。窓から見える風景の色すら、雪の白で染まっているのだから。唯一他の色を見せてくれるの

は少年の纏う黒である。
黒い服、黒い髪、黒い瞳、黒い靴、黒い靴下、黒い睫毛、黒いマニキュア、黒い腕時計、黒いアクセサリー。
肌の色は少女と同じく白に近いのに、纏うものは全て黒。その黒は白の身の世界ではある意味異色で在る。

少女は少年の黒を白だけの世界に訪れた新たな世界の色だと感じていた。それが少年の迷い込んだが故に刻まれてしまった色だったとしても。

少女は望んでいた。白を染めるなにかを。その色が少年の持つ黒だった。ただそれだけの話だと少女は思っている。

少年にとってどうなのかなんて少女には解らない。なぜなら少女は少女でしかないのだ。少年の持つ黒以外の色は知らない、白だけの世界で生きてきた。

そんな白の世界が育てた少女。その世界が笑った瞬間に、少女は生きていくことはできないのだろうかと考えていた。

その瞬間こそが、己の死なのだと感じていた。確信を抱くほどに、強く、強く。

「世界が笑った瞬間に私を忘れて？」

少女は同じ言葉を繰り返す。愛しげに笑って、少年に忘れることを願った。それがどんなに残酷な願いなのか解っていないながら、それでも少女は願う。

少年が己の死で傷つかないように。傷つくくらいなら忘れてほしいと、そう願っている。

少年は少女の想いに気づかない。それも当たり前だ。少年とて少年でしかない。少女の想いに気づくことなど言ってもらえない限りは無理なのだ。

悟ることができたとして、それは真に少女の思いなのかどうかなど

本人が判断しなければ解らないことでもある。けれどそこで嘘を吐かれてしまえば本当など一生本人にしか解らぬ闇の中。だからこそ、少年はその真意が解らない。混乱と困惑。どうしてとなんで。さまざまな疑問が脳内を飛び交っては駆け巡る。それでも少女は依然笑ったまま。愛しいと訴えるその眼差しを、少年へと向けたまま。

「どうして、そんなことを言う？」

からからに乾いた喉を潤すように一度唾を呑みこんで、ようやっと零すことができた言葉はなんと率直で陳腐なのか。

それでも、問いたい。少女の言葉の真意を。嘘偽りない本音を。それが絶望的な言葉であっても、少年は少女の言葉で真相を知りたがった。

少女は笑みを崩すことなく唄うように言葉を並べた。

「世界がね？　ああ、これは私がいつも口にいる白の世界のことなんだけど、その世界が笑ったら……私、その瞬間にきつと死んでると思うの。だけど、それを悲しんでは欲しくないのよ。私が貴方から貰った黒の色。私知ることのできた貴方。白以外何も知らなかった私に与え、教えてくれたその黒の色を、貴方を、私が忘れないから……貴方は白の色を、私を、世界が笑った瞬間に忘れて？」

お願いよ？と二度目の念押し。少年は言葉が出なかった。まるで明日出掛けます、と言わんばかりの口調で少女は世界が笑った瞬間に死ぬのだと言う。嘘だと叫びたかった。だけど、嘘だと叫べなかった。なぜなら少年は知っていた。少女の病の重さを、それがもう、治らないのだということを。

だからこそ、少年が此処にいるのだということも。

少女は笑う。愛しげに少年を見つめて、お願いよ、と逆らえぬ言葉を少年に送る。

少年は黙る。愛しげに見つめる少女の願いを、逆らいたいと望む己に気付きながら頷いた。

少女は嬉しそうに笑って。少年は泣きそうに俯いて。少女は幸せそうに礼を述べて。少年は泣き声を殺して首を横に振る。

「本当にありがとう。死神さん。」

ふうわりと、穏やかに笑んで見せる少女のその言葉に少年　死神は咄嗟に顔をあげ、そして　声をあげて泣いた。

少女はそれをただ愛しげに見つめて、最後のお願いよ、と前置きして。

「世界が笑った瞬間に私を忘れて？」（私を、殺して？）

少女がそう言ったその瞬間、白の世界は、ゆるりと確かに笑う。少年は世界が笑うその瞬間、少女を忘れ、死の鎌を振り下ろす。

こうして、白の世界は幕を閉じる。その世界に唯一存在した少女を

呑みこんで。

白の世界は、静かに、笑う。

失うくらいなら、奪ってほしい。

「失うくらいなら、奪ってほしい。」

夜空に瞬く星屑に零した独り言。何を失うくらいなら何を奪ってほしいのか。少年には解らなかつた。けれど、うつすらと心に残る感情が解っていると訴える。

それがなんなのかを確かめる術を持たぬ少年は苛立ちとともに歯を食いしばった。ギリリ、と音を立てる歯軋りは痛みを感じさせるのに、心を感じた痛みはそれ以上なのだと訴える。

忘れた出来事は不快感しか残さない。ならどうして忘れてしまったのか。大抵のことならば忘れることなどしない。それが少年の役目でもあり、終わりを捧ぐ者としての務めだ。

なのに、少年は忘れてしまった。こんなにも痛みを与えてしまうほどのことを、忘れてしまったのだ。

それはきつと少年にとって一番大切で、失いたくないものだったのだろう。忘れてしまった少年がそう思うほどに痛みは深く、傷も重く。

未だにじわじわと疼くそれを持って余すように、少年は手に持っていた大きな漆黒の鎌を握り直した。

黒い服、黒い鎌、黒い瞳、黒い髪、黒い靴、黒い靴下、黒いマニキュア、黒い睫毛、黒い腕時計、黒いアクセサリー。

全てを黒で染めながら、闇色のカーテンを引き、散らばる宝石のような星空を見上げて生きる少年は死神だった。

生まれたその瞬間から死神としての地位を与えられ、人間という肉体を持ちながらも死を与え、生を奪い、全てを記憶する者として生きてきた。

少年に生はあれど、死は存在しない。他者の生を奪うことはあれど、

己の生を奪われることはない。

死は身近にありながら、身近に存在しなかった。生まれた瞬間に永遠を定められた少年に、終幕は訪れない。

だからこそ死を与える存在として在ることが許された。生を奪うその咎を贖う為に永遠を生きるのだから。

それを苦痛に思ったことも、寂しく思ったことも、少年には一度たりとてなかった。今の今までそれが当たり前だったのだから。

そう、今の今までは。

少年は寂しいと感じていた。独りであることを苦痛だと思っていた。今更な感情と痛み。それが示すものはなんなのか。

訳のわからない自分の心。振り回される己に不快感しか示せない。けれどそれを上回る言葉が心の中に溢れている。

忘れたくない　その一言が、少年を苦しめていた。

「オレは、一体何を忘れている？」

教えを乞うように夜空へと伸ばされた腕。広げられた掌は星屑の一片を掴もうと大きく広げられ、それに応えるように星屑は一つ流れて落ちていく。

それが手の中へと収まるその瞬間に握り締めれば、溢れ出す仄かな灯り。人間ならば掴めるはずのない星屑。それを少年は掴んでいた。手の中に収まる星屑は小さく訴えるような光でもって、少年に答えを託す。それは一瞬の出来事。

ひと際強く輝いて砕け散った欠片達が、少年の忘れていた記憶を一つ一つ呼び覚ました。

初めての出会いは偶然。死を与える為に訪れたのではなく、本当に迷い込んでしまっただけのこと。そんな少年に少女はふわりと浮か

べた笑みで歓迎を示す。

「いらつしゃい。迷い子さん。」と、優しい慈しみを言葉で見せてくれる。

次の出会いは必然。少年が望み、少女が願い、そしてそれは必然を生み出して出会わせた。少年の胸の奥には死神を隠し、少女の胸の奥には想いを隠して。

「こんにちは。」「ああ、こんにちは。」互いに交わし合う挨拶が、ただ愛しかった。

幾度も重ねた出会い。それはいつしか逢瀬と呼ばれるものへと変わり、少女は自身の世界に色が増えたことを喜び、少年は独りから一人、そして、二人へとなることを喜んだ。

「幸せね。」「幸せ、だな。」そう紡ぎ合う二人の顔に笑みは溢れて止まらない。

最後の出会いは運命。少女が死期を悟り、少年が役目を果たす。それは残酷なまでに美しさを伴う儀式。少女は願った。少年は望んだ。けれど、それは交わることを許さない。

「世界が笑った瞬間に私を忘れて?」「忘れたくない、のに。」無情な現実は互いに傷跡を残して死んだ。

「本当にありがとう。死神さん。」

優しい微笑みを、ふうわりと浮かべた少女は、少年の本来の姿を呼び覚まして。少年に涙を流せながらも、自身の死を、少年に託した。

少女は泣かなかった。ただ、最後まで笑っていた。嬉しそうに、愛

しそくに、優しく、慈しみを少年の為に見せていた。

少年は泣いた。少女の想いに、少女の気遣いに、残酷だと嘆いてはそれを受け入れるしかない現実を恨んで、少女の為に鎌を振り下ろす。

そして、少年は全てを忘れて白き世界から立ち去った。

忘れていた過去。少年の傷痕。痛みと不快感を生み出した、愛しいはずの記憶。忘れたくないと望んだそれを、簡単に忘れてしまった己が憎い。

全てを思い出しても痛みは止まらない。寧ろ痛みは増えるばかり。愛しいと叫ぶ心が、傷跡を抉りだす。

どうしてこの手は死を与えることしか、生を奪うことしかできないのだろうか。いつそ、いつそあの瞬間に自身の魂すらもこの鎌で奪うことができたのなら。

少年はそれを望んでいた。決して叶わぬそれを。そして、少女はそれを望むと解って願ったのだろう。「世界が笑った瞬間に私を忘れて？」と。

それでもなお、少女の願いを違えることになる和解っていても、少年は望む。

「失うくらいなら、奪ってほしい。」（オレの生命を、）

切なる望みは星屑へと託される。キラリと瞬いては流れていく星屑には、それを叶えるだけの力はなく。また、応えることも許されない。

少年の背負った咎は、役目で在ろうと贖わなければならないモノ。

そう在ることを選んだのもまた少年であるからこそ、叶えることは、誰にも出来ない。

少年は、ゆるりと瞼を閉ざす。ほろりと零された雫は、静かに頬を伝い落ちて。

黒の世界へと、消えて、逝く。

歪んでしまう願いなど、誰も聞かない。

「歪んでしまう願いなど、誰も聞かない。」

森の奥深く、ひっそりと存在した朽ち果てた教会の中で女はそう言った。

銀色の髪が時折ふわりと迷い込む風に靡いて揺れる。天井から射し込む光はそれを綺麗に輝かせては女を儚くさせる。

男はただ、それを見ていた。見つめることしか許されないのは、神聖な空気の中で女が神に祈りを捧げているからだろう。

零される言葉とは裏腹に、女の両手は固く祈るように握りしめられ、両膝を折っては大地につけている。

固く瞼を閉ざした女は言葉を繰り返す。

「歪んでしまう願いなど、誰も聞かない。」

そう、それは神すらも　と、小さく付け足して、ゆっくりと両手を解いては片手を大地について立ち上がる。

それに合わせて揺れる銀の長髪。ゆらり、ゆらりと誘惑するかのような誘いに伸び掛ける手を握り締めることで男はそれを抑え込んだ。触れることは許されない。女は綺麗なままではなくてはいけないのだ。清らかなる銀の乙女として、聖戦という名の殺戮へと赴く為に。

銀の乙女　それは、清らかなる処女であり、神に愛された娘。その証として銀の色を与えられる。広きこの世界を探せど、銀の色を抱くのは此処にいる女ただ一人。

そして、銀の乙女として相応しいと言われる力　予知能力。全てを読み、全てを識り、全てを悟る者。女はその力を生まれた時より

持っていた。

銀と予知。この二つは間違いなく女を銀の乙女と示す。女の両親はその発覚を恐れ、女を連れてこの教会へと逃げ込んだ。

バテてしまえば自分達の子供がどのような目に合うのか、想像するだけで容易く解る。きつと利用されるだけ利用され、最後には力を継ぐ者を産み落とす為の傀儡とされてしまうのだ。

事実、女が存在が街の人間にバテた瞬間にその運命は決まっていた。そして、発覚した原因は男にあった。

森の中に迷い込み、偶然朽ち果てた教会を見つけ、そこにいた女と知り合い、それを自身の両親に告げてしまったがために見つかってしまったのだ。

その頃の男は幼く、女もまた同様に幼かった。だからこそ発覚した当初は周りの大変さの意味が解らず、ただ、男は言うべきではなかったと、女は見つかるべきではなかったということだけを理解していた。

年を重ねることにその理解は深まり、男は後悔を覚える。言わなければ女は普通の幸せを手に入れることができたのに、と。

しかし女は言う。定められた運命には逆らえない。遅かれ早かれ自分分は銀の乙女になっていた、と。

「……俺を、責めないのか？」

無意識に零れた言葉。女は振り返り、その意味を問うように瞳を細めた。その瞳すら綺麗な銀色に染まっている。

男はそれから逃れるかのように視線をそらし、地面を見つめた。二人の間に沈黙が落ちる。流れる風だけが二人の存在を証明し、射し込む光が二人を浮き彫りにさせた。

黙り込んだまま、どちらも口を開こうとしない。ただ、時が流れて女の許された時間が短くなっていくばかり。

それでも女は男を見つめたまま、何も言わない。男は沈黙を苦痛に

感じて、吐き出すように言葉を紡いだ。

「どうして、俺を責めない？お前が銀の乙女など言われた原因である俺を、どうして、」

「……歪んだ願いは、誰にも聞こえない。」

「え？」

「歪んでしまう願いなど、誰も聞かない。けれど、歪んだ願いは、誰にも聞こえない。」

女の言葉の意味が解らず、男は黙りこむ。歪んでしまう願い、歪んだ願い。そのどこに違いがあると言うのか。そしてどうして誰も聞かないのか、誰にも聞こえないのか。

男には解らない。女の言葉の意味も、女の考えも。女はそんな男の様子を見て小さく笑みを零した。

昔からそうだった。男は解らないことがあればまず黙り込む。そしてどういいう意味なのか自ら考えるのだ。全てを聞こうとするのではなく、まず、自分で考える。

それでも解らない場合のみ、答えを乞う。解った場合はそれを口にしておいて、合っているかどうかの確認を取る。

今回は前者になるだろう。女のその考えはきつと当たっている。だからこそ、問われる前に答えを口にしようとするりと口を開いた。

「人の願いは最初は純粹なものだ。とても些細な願いだからこそ、なおさらに。けれどそれが叶えば願いは欲深いものへと進化を遂げる。今の聖戦がまさにそれだ。聖戦と名を付けた欲深さに歪んでしまう願い。それを聞くものなど一人としていないよ。神だって愚かなことだと笑って聞こうとしない。けれど、既に歪んだ願いは誰にも聞こえない。願う者にしか、聞こえない。だから、君の先程の言葉は、私には聞こえない。」

そういうことだ、と締めくくり、女は一步足を踏み出した。男は言われた言葉を噛み砕きながら一つ一つ消化することに必死で、近づく女に気づかない。

一步、一步、もう一步。そうして距離があと一步でゼロになるところで男は女に気づき、女は男の為に口を開く。

「聞こえないんだよ。君の願いは。自分を責めてほしいと願う歪んだ願いを叶えられるほど、私は弱くない。　とうの昔に、君を赦してしまっているのに、どうして責めることができるんだろうね？だから、君の願いは聞こえない。そして、私の願いも、君には聞こえないんだよ。」

ポツリ、ポツリと間近で落とされる言葉の羅列。男は驚きに目を見開いて、紡ぐべき言葉を探そうと必死だった。

必死に探して、けれど、女の言葉の意味を全て理解しきれずにいる自分の言葉などなんの意味があるのか。

結局は己に悔しさを感じて男は項垂れる。そんな男に女は笑った。

「歪んでしまう願いなど、誰も聞かない。」（誰にも届かない）

何度も繰り返される言葉を紡いで、楽しそうに笑って、女は　泣いた。

ほろり、ホロリ、零れる尊いその涙は、誰の手に拭われることなく地面へと落ちる。

「歪んだ私の願いも、誰も聞かない、聞こえない。　君を、」（

愛してる)

呑みこまれた言葉を、男のそれに押し付けた唇に託して、女は届かぬ想いを独り嘆く。

聞こえない願いは嘆きとともに、そっと、朽ちて逝く。

本当に救いが存在するのなら、どうか、

「本当に救いが存在するのなら、どうか、」

静かに、静かに、零れていく赤い雫を拭いながら、男は茫然と呟いた。

始まりを紡いだのは誰だったのか。終わりのない絶望を呼んだのは誰だったのか。始まりそのものが終わりなのだと言ったのは誰だったのか。もう、男には解らない。解ることは眼の前で壊れていく自身の故郷のことだけ。

自国の誇りと他国への敵対心。そしてその中で渦巻く欲深い独占欲という名の権力が獣となつて全てを屠っていく。剣に託したのは明るい未来。けれど剣が奪うのは未来を担う命。奪つて、奪われて、壊して、壊されて。

ああ、矛盾ばかりの聖戦がこの街を駆け抜けていったのだと、男は思い出す。

そして、その矛盾を生み出したのが己自身だと、男は過去を振り返る。

幼い頃、男が偶然見つけてしまった朽ち果てた教会に住まう女

銀の乙女存在を自身の両親に話したことから全ては始まったのか
もしれない。

いや、それがなくとも始まっていたのかももしれない。けれど男にとつての始まりは、女との出会いであり、それを両親に告げたことになる。

幼すぎた男はただ、新しくできた友達について話しただけ。自分の金色の髪とは異なる綺麗な銀色を持つ彼女とこれからも仲良くしたいと望んでいただけ。

女も同様な気持ちだっただろう。己について何も知らずにひっそりと森の奥深い場所に朽ち果てた教会で日々を過ごす中、初めてできた友達に喜びを覚えていたのだから。

けれど、大人は子供の感情など知らない。知ろうともしない。幼い子供の口が告げた銀の髪、銀の瞳　銀の乙女。それだけを知れば十分だったのだ。

男の親の口から噂は広まり、止まることなく街中、国中に広がっていくのは眼に見えて解りきったことだ。女の両親もそれを理解していたのだらう。

早々に娘を連れて逃げようと画策するも、時既に遅し。国王の使いと称した騎士達が、女を、女の両親を捕らえて城へと連れて行ったのだ。

男はそんなことも知らず、毎日毎日教会へと足を運んだ。どんなに探しても見つからない女を求めて、何度も、何度も。

男の母親はそんな男に「もうあの子には会えないよ。銀の乙女は尊い方なんだからね。」と諫めるようにそう告げた。

その意味を男は理解できなかった。理解するにはあまりにも幼すぎて。唯一解ったのは、もう二度と会えないというその言葉だけ。

どうして？と無垢な瞳で問うた男に母親は優しく物語を語るように男に銀の乙女について聞かせた。その尊さを、その異形さを、その至高さを。ゆっくりと、時間を掛けて男に話したのだ。

男は全てを理解することはできず、その時はただ、女存在を両親に語るべきではなかったのだということだけを理解した。

その理解とともに後悔した。どうしてあの時言ってしまったのだらう、と。言わなければもっとずっと一緒にいられたのに、と。

もう二度と会えないことが酷く寂しくて、それでももしかしたらまた会えるかもしれないと、男は何度も教会へと足を運んだ。いつか女に会えるその日を、心待ちにしながら。

そして、運命の日は、訪れた。

今日も女を待つために森の奥深くに静かに佇む教会へと向かい、その場に辿り着いたその瞬間　男は息を呑んで立ち止まる。

瓦礫の散らばる教会の入り口に、白いローブに身を包んだ女性らしき人が一人、男に背を向けながら立っている。

もしかして、と期待を抱くも、違っていたら、と心は怖気づく。声を掛けて、振り返ったその姿に銀の色がなければきつと落胆するだろう。

解りきっているからこそ掛けられない声。けれど、その場から去ることもまたできない。男は女を待つために此処にいるのだから。

互いに微動だにせぬまま佇むこと暫し。突如ふわりと吹いた風に眼の前の白いローブのフードが靡いて　ふわり、と、銀の髪が舞い落ちた。

見開かれる男の瞳。震える唇からは女の名前が零れ、それに合わせてゆるりと振り返った銀の髪を持ち主は、男を見て微笑んだ。

「やっと、また、会えたね。」

あの幼い日の面影を残した微笑みは嬉しそうに、切なそうに、男を見つめていて。男は何も言えず、感情のままに駆け寄ってきつく、きつく、女を抱きしめた。

それが禁忌だと解っていないながら、それでももう二度と離さないと言わんばかりにきつく、きつく抱きしめて。女はそれに応えることはなく、けれど、突き放しもしなかった。ただ、受け入れるだけ。

再会した二人は朽ち果てた教会の前で、何度も逢瀬を交わす。互いの日常を語り、幼い頃の遊びをし、時間の赦す限り、離れていた日々を埋めるように傍に寄り添った。

胸に抱えた後悔と、告げられぬ想いをひた隠しにしながら、二人は

幸せな日々を繋いでいた。

いつかそんな幸せに終わりが来ると知っていたいながら、それでもその終わりから眼を逸らして今の幸せだけを見つめ続けてしまうのは、人間の愚かさなのだろうか。

男は壊れて逝く街中で過去を見つめながら、赤く染まった自身の両手を見下ろした。

守るために、生きるために、両手で振るったのは騎士と同じく命を奪う刃で。言い訳のようにこれは仕方ないのだと口にして、流れる赫い血を見ない振りでもやり過ごす。

何度も何度も吐いて、それでも死にたくなくて、必死に刃を振るって、屠って、壊して、殺して。毎日がその繰り返しで、それに終わりを告げたのは、銀の乙女が討たれたという、哀しい報せ。

銀の乙女が討たれ、聖戦が終わったその頃には、男の周りには誰もいなかった。男は、たった独り生き延びたのだ。

守りたい者達は男が生きるために命を奪った数だけ、いや、それ以上に奪われて。本当に守りたい存在すら守れぬまま、男は壊れた街中で這いつくばって生きていた。

「生きてる、けど……こんな生を、望んだわけじゃない。」

憎しみには憎しみを。奪うのなら奪い返せ。殺されるのならその前に殺せ。生きたいのなら無情であれ。

駆け巡る言葉の羅列。生きなければ、生きなければ、生きなければ、生きなければ、死にたくない。

しがみついた生に対する執着心。男はそれを醜いと思い、また、静かに赤い雫を流す。

枯れ果てた透明の涙は赤く染まり、男はそれを拭うそぶりを見せることなくただ落としていく。

「本当に救いが存在するのなら、どうか、」（彼女を、返してくれ）

絶望に満ちた声で男は叫ぶ。望んだ生はこんなモノじゃないと、救いを、救いを、と両手を空に向けて伸ばした。溢れる雫は止まることを知らずに男の頬を濡らす。赤く、朱く、緋く染め上げて、男を失意の底へと、突き落す。

「こんな世界で生きるために、俺は、アイツは、」（生まれてきたんじゃない！！）

嘆きの声が響き渡る。誰も聞かない、壊れたその街中で、男は声を上げた。

救いを求めるように叫ぶその声は、絶望とともに風の中に消えて逝く。

全ては、君達を選んだことだと、識るといい。

「全ては、君達を選んだことだと、識るといい。」

色彩を持つ神は言う。何も掬えぬ両腕を広げ、淡々と感情の宿らぬ、宣託を告げるように厳かに。

硝子の瞳が見据えるのは世界という名の箱庭。そこで暮らす人間達の愚かさを、神は静かに見守っていた。

最初は慈しみと愛しさを持って見つめていたはずなのに、今ではもう、どちらの感情も枯れ果ててしまった。

どうしてこうなってしまったのか。そんなことを考えても意味がないことだとすぐに嗤う。

「選んだのは、人間。それを受け入れたのは、私。変えることは、誰にもできない。」

訥々と落とされる事実の破片。人間達の耳に届くことなく碎けて消えていく。

最初に選んだのは人間。しかしそれは無意識の選択だ。何故なら、彼らは気付いていないのだから。

一つ、願いを叶えるごとに増える欲望。もう一つ叶えればまたもう一つ、と尽きることを知らない醜い欲望は膨れ上がり、それを叶える手段を得るためだけに、祈りを忘れていった。

人間とはここまで欲深い生き物なのかと、その時神は落胆し、絶望し、そして 忘れられた祈りを受け入れた。

白の少女の願い 己の死を忘れることで悲しまず、生きてくれることを願うその祈りは純粹なまま。

黒の少年の望み　奪う役目を受け入れながら、失うくらいなら
つそ奪ってほしいと望む祈りは儂いまま。

背中合わせの二人の祈りは、混じり合うことも、溶け合うことも
きずに個々を保ったまま広げられた腕の中へ収まり。

銀の乙女の嘆き　聞こえぬ願いを歪ませて、それでも告げられぬ
想いをそつと唇に託して祈るその様は憐れ。

金の青年の叫び　生きるために手を赫で汚しては奪い壊し殺し屠
り、独り救いを求めるように叫んで祈るその様は哀れ。

繋ぎ合った手を解かれ佇む二人の祈りは、欲望の闇に吞まれて無残
にも散り散りに引き裂かれ、広げられた腕の中へと辿りつき。

掬いあげられぬ両腕は、そつとその祈りを抱きしめるように輪を作
り、腕の主はゆっくりと頬を寄せて温もりを分け与える。

願い、望み、嘆き、叫ぶ。どれもが悲しいまでに愛しく。愛しいま
でに悲しい。祈りを求めるように伸ばされた手が　只管に寂しい。
忘れられてしまった祈りを、今更求めるのか。その意味を知ろうと
もせず、識ろうともせず、求めるばかりの人間が哀しい。

ほろり、ホロリ、瞳から零れる色彩の雫を祈りへと降り注ぐ。叶え
ることも、掬うことも、抱くこともできぬことに懺悔するように。

「祈ること自体は忘れていない。けれど、祈るその意味を、人間は
忘れてしまった。そして私はそれを受け入れた。だからもう、祈り
を掬いあげることが、出来ない。」

祈りに罪はないけれど、祈りを掬えぬと定めたのは神自身。忘れら
れた祈りは何処へ還ることもできず、箱庭の外を彷徨うばかり。そ
れがあまりにも悲しくて、つい、腕を広げて受け入れてしまう。し

かし、それは形だけ。

神は祈りを受け入れない。祈りを聞いても受け入れない。祈りを忘れたのは人間で、祈りの意味を知（識）ろうともしないのもまた人間だ。

「忘れられた祈り。 それは、人間達の神への信頼。世界への愛情。祈りとは、その存在を肯定し、受け入れ、慈しみと尊敬の念を伝えること。けれど、人間はいつしか神という存在を知らながらも忘れ、世界という揺り籠への愛を哀へと変えた。 祈りそのものを、欲望の中へと沈ませた。」

それは神の嘆きそのものだった。祈りより伝わる人間達の信頼が嬉しくて、自身が創り出した箱庭に対する愛情が嬉しくて。

人間達の幸せの為にと、祈りとともに願いを叶えた。最初は些細な願いだった。けれど、込められる祈りはとても温かく、優しく。それに応えるだけの力を持っていると自負していたからこそ差し伸べたこの両手。人間達はその都度幸せを得、神へと祈りという名の感謝を捧げた。

幸せだった。それだけで十分だった。けれど、人間は一つ幸せを得ると次の幸せを得ようと貪欲に動き出す。

神はその度に手を差し伸べて叶えていく。そして人間達は祈りを捧げる。それこそが正しいループ だったのだ。

人間達は神が与える幸せに溺れ、努力を忘れ、いつの間にかそれが当たり前のことなのだと思いはじめた。いや、当たり前なのだと勘違いしたのだ。

神が与える幸せは無償のモノで、人間達が望めば確実に貰えるものなのだと、愚かな勘違いを、過ちを、犯したのだ。

その結果、人間は幸せばかりを求めて祈りを忘れていった。神に対する信頼を、感謝を、捨てたのだ。

神がその事実気付いた時にはもう遅く、世界という名の箱庭は幸

せという名の欲望を満たすためだけに他者を屠り、奪い、壊し、殺す。そんな人間達で溢れかえっていた。

啞然とし、茫然とし、嘆きすら忘れて、人間達の欲深さを目に焼き付けた。全ての人間がそうだったわけではない。

しかし、大半の人間がそうだったという事実は変わらない。それは確実に神を苦しめ、追い詰め、最終的には諦観させたのだ。

「忘れられた祈りはもう、消えた。本当の意味すら、消えて逝った。なら。私もそれを受け入れて、人間達に差し伸べる手を、消してしまってもいいだろう?」

疲れきった声で懇願したそれは、祈りに向けられたものなのか、人間達へと向けられたものなのか。

どちらにせよ、神はもう二度と人間に手を差し伸べることはなく、祈りを掬うことはないのだ。

その事実を口にした。ただ、それだけのこと。

「全ては、君達を選んだことだと、識るといい。」（祈りに懺悔を乞うといひ）

伏せられた目蓋。閉ざされる硝子の瞳。何も紡がれぬ絶望に濡れた唇。

色彩の神は、掬えぬ両腕で四つの祈りを抱きしめる振りをしたままゆるりと微睡みの中へ。

もう目覚めることのないように、人間達をこの瞳に映すことのないように。いつそ世界そのものが滅んでしまえばいいとさえ思いなが

ら、昇華されぬ忘れられた祈りを想い、ほろり、ホロリと色彩の雫を零していく。

抱かれるように漂う四つの祈りは、色彩の雫の温もりにはらり、ハ
ラリとその身を散らしていく。

静かに眠る神は、忘れられた祈りを掬えぬ己を見離した。

それでもなお、人間が愛おしいと嘆くその心にすら気付かぬま
ま、静かに、静かに……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998t/>

忘れられた祈り

2011年10月9日04時31分発行